

疲れすぎて眠れぬ夜のために 内田樹（たつる）

・「人間はわりと簡単に壊れる」

学生を見ていると、勉強して、バイトやって、クラブやって、セカンドスクールで資格を取って、エステに通って、駅前留学して、海外旅行して……とものすごくタイトでハードな生活設計をしている人がたまにいます。

一日二四時間しかないんだから、それは無理でしょ。それでは、身体が持ちません。

精神的にも体力的にも、使える資源には限界というものがあります。目標を適度に設定し、資源を分配する先に優先順位をつけないと、人間は壊れます。人間て、わりと簡単に壊れます。

若い人が分かっていないのは（あるいは分かろうとしないのは）この「人間はわりと簡単に壊れる」という事実です。

人は夢と現実を同時に生きなければなりません。この匙加減がとても難しいのです。

・愛情は「育てる」もの

愛情をずいぶん乱暴にこき使う人がいます。相手が自分のことをどれほど愛しているのか知ろうとして、愛情を「試す」人がいます。無理難題をふきかけたり、傷つけたり、裏切ったり……さまざまな「試練」を愛情に与えて、それを生き延びたら、それが「ほんとうの愛情」だ、というようなことを考える。

でも、これは間違ってますよ。愛情は「試す」ものでありません。「育てる」ものです。

きちんと水をやって日に当てて肥料を与えて、じっくり育てるものです。

若芽のうちに、風雨にさらして、踏みつけて、それでもなお生き延びるかどうかが実験するというようなことをしても、何の意味もありません。ほとんどの愛情は、そんなことをすれば、すぐに枯死してしまうでしょう。

愛情を最大化するためには、愛情にも「命がある」ということを知る必要があります。ていねいに慈しんで、育てることによってはじめて「風雪に耐える」ほどの勁(つよ)さを持つようになるのです。

・自己」が極端に縮んでいる

先ほど、すぐに「むかつく」若者のことを話しましたけれど、すぐに「むかつく」若者と、「いくらでも不愉快な人間関係に耐えられる」若者は、まるで逆なようですが、実は精神構造は同一なのです。

気持ちの悪い客を受け容れる売春女子高生、いじめられながらも仲間にへばりついている中学生、家庭内離婚をして無言で暮らす中年夫婦、バカな上司にこき使われているサラリーマン……彼らのメンタリティは「むかつく」若者と本質的には同じです。

どちらにも共通するのは「自己」が極端に縮んでいるということです。

「むかつく」若者の場合は「むかつき感」が自己の中心にあり、いわば「王位」を占めています。それ以外の人間的資源はもっぱら「むかつき感」の解消のために奉仕することを強いられています。

「耐える」人の場合は、「耐えること」が自己の中心にあります。それ以外のすべては「耐える」ことのために動員されます。時間も、エネルギーも、愛情も、論理的思考力も、想像力も……人間的資源の洗いざらいが「耐える」ことに蕩尽(とうじん)されます。「我慢している人間」は、その「我慢」にどういう意義があるのか、それを絶えず自分に言い聞かせないといけません。なにしろ「我慢」しているわけですから、ただぼうっとしてはとても耐えきれないわけです。何か大義名分が必要。これは一時の方便だとか、「もっと大きな目的のための一時的な迂回なのだ」とか。

・「中年のオヤジ」

世に言う「中年のオヤジ」というのは、この「耐えること」が劇的に人格化されたものだ、といってよいでしょう。

会社で上司の罵声に耐え、部下の暴言に耐え、クライアントのわがままに耐え、満員電車での長距離通勤に耐え、妻の仏頂面に耐え、セックスレスに耐え、子どもの沈黙の軽蔑に耐え、巨額のローンに耐え、背広の肘のほろこびに耐え、痔疾の痛みには耐え……といったふうに、全身これ「忍耐」からできているのが「中年のオヤジ」という存在です。

これはたぶん、どこかで「ボタンの掛け違い」があったせいだと思います。

人生のある段階で（たぶん、かなり早い時期に）、不愉快な人間関係に耐えている自分を「許す」か、あるいは「誇る」か、とにかく「認めて」しまったのです。そして、その後、「不快に耐えている」ということを自分の人間的な器量の大きさを示す指標であるとか、人間的成熟のあかしであるとか、そういうふうに合理化してしまったのです。

・専業主婦がいい

ゼミの学生たちに毎年同じことを訊ねてみるのですが、つい一〇年前までは、ゼミの学生一五人くらいのほとんど全員が働いて自立したいと言っていたのが、今年あたりになると、専業主婦がいいという学生が過半数に達しました。別に優雅な主婦生活を夢見ているわけではないようです。別に貧乏でもいい、と言うんですから。

・・・

彼女たちは、母親たちの世代が、住宅ローンなど身の丈に合わない借金を背負い込んで、低賃金のパートなどをして必死にローンを払う姿を見てきているわけです。そして、そういうふうな意味での上昇志向がまるで間尺に合わないということを、若い世代は見抜き始めているのです。

「家なんかいらぬから、その分、家族で旅行したり、美味しいものを食べたりして、愉しもう」というふうに早い段階で彼女たちの両親が方向転換していれば、母親もパートなんかに出ないで済んだし、家にずっといてくれて、もっと一家団らんを愉しめたのに……という「鍵っ子」の悔恨が彼女たちにはあるようです。

・「へらへらと質の高い仕事をする」

男の中には、自分の本業について、「オレの仕事ですか？ いやあ、つまらない仕事ですよ、ほんとに」というようなことを言いながら、非常に質の高い仕事をしている人がけっこういます。

・・・

女性で成功している人は、まず例外なく大まじめなのです。

・・・

この「へらへらと質の高い仕事をする」ためのノウハウを知っているか知らないかという違いが、同じような社会的プレッシャーを受けながら耐えられる人と潰れる人の違いを生み出しているのではないかとぼくは思います。

・「勝つ」「成功する」ということ

「告発する」ということは、「告発される」側の憎しみを引き受けることです。「勝つ」ということは、「負けた」人間の嫉妬を引き受けることです。「成功する」ということは「成功できなかった」人間の邪眼にみつめられることです。

・「一律時給七五〇円」という賃金

「一律時給七五〇円」という賃金は人間を腐らせます。

だって、全員が時給七五〇円で働いていて、人よりがんばっても、せいぜい「来月から時給七八〇円ね」という程度です。マニュアル化された、誰がやっても同じような仕事をあてがわれて、そこでは仕事のクオリティを高めたり、創意工夫を凝らしたりする余地がほとんどありません。だから、勤務期間の長さとか、遅刻の回数くらいしか差別化のデータがないのです。

やることは決まっている、うまくやっても別に誉められないし、決まった通りのことをしなかったら怒られる、そういうのがレイバーです。それはビジネスではありません。

こういうことを言うと怒る人がいるでしょうが、ぼく自身の経験から言っても、レイバー的なアルバイトからは、時給以外に何も得るものはありません。マニュアルがきちんとは決まってるようなバイトの場合は、一〇年間やってもたぶんそれを通じて社会的なスキル

が身につくとか、人間的な成長を遂げるということは期待できないでしょう。

・ビジネスとレイバーの違い

ビジネスとレイバーの違いはどこにあるのか、それは「リスク」と「責任」ということにかかわってきます。

ビジネスにおいては、リスクを取る人間が決定を下します。

デシジョン・メイキングはリスク・テイキングと表裏一体です。

リスクを取ることと引き替えに決定権を受け取り、それが成功したら報酬が得られる。失敗したら責任を取らされる。

単純な話です。

・岐路に立つ時の判断

「このまま行っても大丈夫だろうか、それとも引き返すべきだろうか」というのはぼくたちが遭遇する典型的な危機です。

どんな生物でも必ずそういう岐路に立ち至ることがあります。この場合、オプションは二つあります。一つは「危険を感知したら、そこを避ける」という判断。もう一つは「危険を感知したら、多数派に従う」という判断です。

「みんながそうするから」という理由で決断する人々、それが「大衆」です。

・「三角坐り」

「三角坐り」というものがあります。

むしろ教師に対して「恭順の意」を表明す

るときにこそ、この子たちは、こういうふうに坐るのだ、ということが分かりました。

しかし、また何という坐り方でしょう。

両手でしっかりと自分の体を抱きしめているわけですから、声も出せないし、手も足も動かさせません。胸を押しつぶしているから深い呼吸もできません。自分の身体そのものを監獄にして、そこに自分を閉じ込めるような身体運用なのです。

・「品格」

「品格」なんていうと、なんだかずいぶん仰々しいものに思えるかも知れませんが、「品」というのは、要するに、「らしさ」の内側にあえて踏みとどまる節度のことです。

「らしさ」の制約の中にとどまる節度を私たちは「品がよい」と呼ぶのです

・粗忽な武術家

合気道の師匠の多田先生から面白いエピソードを聞いたことがあります。

以前、ある古武道の大会の演武者控え室で、一人の武術家が見ず知らずの武術家に、「おたくの流派では、こんなふう指を掴まれたときに、どういうふうにかわすのですか？」と訊ねられたことがありました。そこで、「うちの流儀ではね」と説明するために、相手に向かって片手を差し出したら、いきなり小指をぽきりと折られた、というのです。

これは手を出す方が悪い、と多田先生は教えてくれました。

見知らぬ相手を「自分の同類」であろうと信じ込んで、自分の弱点を平気でさらした、という点において、指を折られた武術家は究極の危機管理術であるはずの「兵法」の基礎が分かっていないことを露呈したからです。誰がこんな武術家に一国一城を委ねるでしょう。

それにしても、どうしてこの粗忽な武術家は自分の隣にたまたまいあわせた人間を「無害な同類」と信じられたのでしょうか。

こういう鈍感さは「均質的な社会」に棲み慣れてしまったものの特徴ですが、その一方には、「武術蒙らしさ」という、節度を忘れたことがあると思います。

・「あのウチダ」

ぼくは中学校では、勉強はよくできるけれど、運動が苦手で、どちらかというとおタク系のぼうっとしたキャラでした。でも、このキャラはつまらないので、高校に入ったときに四五〇人同学年いるうちに同じ中学から来た子が一人しかいないのをさいわい、「オレはね、一回口に出したことは引かないよ」というかなり気合いの入った不良少年としてデビューしました。ジャズを聴いて、煙草を吸って、小難しい哲学書を読んで、教室では先生にしつこく絡んで…。中学のときの同級生が見たら「ウチダ、いったいどうしちやったの～」とびっくりするような変身でしたけれど、このキャラは「美味しいキャラ」でしたね。すぐにワル仲間ができたし、女の子にもけっこうもてました。

このキャラは結局、キャラクター的に派手すぎてそのまま暴走して、高校中退というかたちで「爆死」しちゃうのですが、どうせ高校に入って適当に作った「嘘キャラ」ですから、挫折しようが、失敗しようが、何しろ「二年くらいしか使ってないキャラ」なんですから、あんまり心が痛むということはありません。

困るのは、高校のクラス会に集まると、その頃の級友は「あのウチダ」を記憶していて、「あのウチダ」に向かって話しかけてくるのだけれど、「あのウチダ」はもういないんですよ。

でも、そういうふうに変化が環境が変わるたびに、キャラを変えるというのは、自分を守るためにはすごく有効な方法だと思います。ぼく自身は、十七、八歳くらいのときの精神的な傷は、「別キャラ」が背負ってくれたので、そのキャラごと「埋葬」してしまいました。

・内田樹

研究者としての内田樹、武道家としての内田樹、家庭人としての内田樹、インターネット上の内田樹……ぼく自身にしても、それらは全部「別人」です（たとえば、今この文章を書いているのは、「物書きとしての内田樹」です。これは、私生活のぼくよりずっと皮肉屋で、冷笑的なキャラです。家庭人としてのぼくはもっと温良で妥協的な人間です）。

というふうにはぼく自身の影武者というか、「式神しきがみ」というか、そういうものがざわざわしているので、仮に仕事で失敗しても、その失敗は「仕事をするぼく」の傷にとどまり、家庭生活や武道修行には別に関係してこないわけです。だって、別人なんですからね。ほんとうに。

ディセンシー 礼儀正しさ

礼儀作法の目的は何よりも「仮面をかぶることによって自分の利益を最大化すること」なんですから。

核家族というのは閉じすぎているのです。

・自立できる人間、孤独に耐えられる人間

ぼくが「自立しろ」ということを学生にがみがみ言うのは、一人で暮らした方が気楽であるとか、誰にも依存しない生き方は素晴らしいとか、そんな薄っぺらなことを言いたいからではありません。そうではなくて、自立できる人間、孤独に耐えられる人間しか、温かい家庭、親しみのあふれる家庭を構築することができないと思っているからです。一人でいることのできる人間だけが、他者がかたわらにあるときの温もりに、深い感謝と敬意を抱くことができるのです。

・殴る男を選ぶ傾向

だから恐ろしいことに、父親からずっと殴られたりした女の子は成長した後も、自分が男を選ぶときに、殴る男を選ぶ傾向があります。世代間連鎖です。それは人を殴るというのは愛情の証拠だからと自分に言い聞かせてきたからです。

・・・

加害者の側が、まさに現代における支配的なイデオロギーで理論武装しているということはあまり言われません。それは「ほんとうの自分」というのが、人間の内部のどこかにあって、その「ほんとうの自分」がピュアでありさえすれば、「外側では何をしても構わない」というイデオロギーです。

・聞き取ったことばを もう一度繰り返すこと

「いい天気ですね」

「いい天気ですね」

二人はこんなふうに終わりなく同じことばをただ繰り返すだけです。でも、この会話が二人にとって至福のコミュニケーションであることがぼくたちには確信されます。どうしてでしょう。現にここには有意な情報のやりとりは何もないのに（唯一の情報らしい情報は佐田啓二が西銀座方面にでかけるらしいということです）。ではいったい、この会話では何がやりとりされているのでしょうか。

二人の間を行き来しているのは、「私はあなたのことばを聞き取った。私たちの間にはコンタクトが成り立っている」というメッセージです。というのも、相手とのコミュニケーションが成り立っていることを相手に知らせる一番確実な方法は、聞き取ったことばをもう一度繰り返すことだからです。

・資本主義がめざすのは

資本主義がめざすのは「たくさん生産する、たくさん流通する、たくさん消費する」ということ、ただそれだけです。それ以外にはどんな目的もありません。

どうしてそんなものが支配的な経済体制になったのか、これについては長い長い話になりますが、あえて一言で言えば「人間はそういうのが好きだから」と言うほかありません。

・人間というのはオリジナリティのない生き物

他人がしたこ

とを見た後にならないと、「自分が一番したかったこと」を思いつかない、それが人間です。銃を乱射して級友を虐殺するほどに「ユニークな」この少年はディカプリオの真似をすることでしか、「自分のユニークさ」を表現できなかったのです。ことほどさように、人間というのはオリジナリティのない生き物なのです。

だからこそ、模倣する「他人」のモデルを決めておいて、「この人以外は真似しないように」という縛りをかけておかないと、たちまちのうちに人間社会は「お互いにそっくり」になってしまうわけです。